

BOOK REVIEW

あたらしい美学をつくる

秋庭史典 著

みすず書房 ISBN 978-4-622-07602-5 C1010 2011年5月発行

評者：渡邊淳司（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

本書によると、美学の役割は美を直接定義することではなく、美のありかを示すことだとある。つまり、美学は「これは美である」と美の可能性を示し続けることで美の輪郭を浮き彫りにする学問である。では、美とはどのようなものに宿るのであろうか。著者は、美学の祖イマヌエル・カントの立場を紹介することから始める。その立場は「主観的合目的性：特定の目的はないけれど、なんだか目的に適っているように感じられる（P16）」によって、機械論と目的論の二つの扉を同時に開くものを美としている。例えば「自然の美は何のためにあるのかはわからないけれども、あたかも何かの目的のために、この自然がつくられたかのように思わせる。（P15）」のである。自然の美は、自然とは何かを客観的に問う科学的問い（機械論）と、自然がなぜそこにあり、そのなかで私たちはどのように生きるべきかという倫理的問い（目的論）を同時に生じさせる。そして、この立場に立てば、機械論の世界認識の問いと目的論的価値解釈の問いが交差するあらゆるところに美は生じると言える。

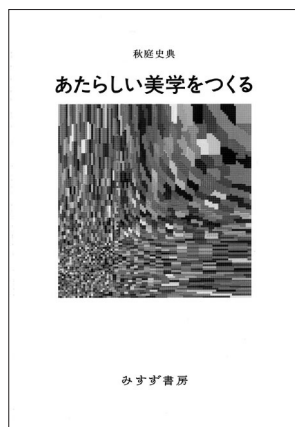
現在、カント没後約200年を経ているが、前述の意味での美学は失われているという。その理由として、目的論の衰退や美学が芸術哲学化してしまったこと等が挙げられているが、ここで著者は、現在の美学を捨てて、前述の立場を援用しながらも現代の科学技術に適合したあたらしい美学をつくることを試みている。つまり、現代の科学技術のなかに機械論と目的論の接点を見出し、新しい美として示すのである。本書では、自然計算（ナチュラル・コンピューティング）の学問分野を美として取り上げている。自然計算とは、DNA コンピュータや粘菌の最短経路探索に代表される、自然を素材とし、そのアルゴリズムが必ずしも明示的に示されない、制御対象が必ずしも直接的に操作されない計算手法である。自然計算は、自然

を素材とした機械論的な計算設計であるとともに、その自然が持つ計算アルゴリズムからは目的論的問いを見出すことができる（例えば、粘菌の最短経路探索において、粘菌自身はそのパズルを解く以外の何らかの目的で運動しているように見える）。

また、著者は美学者としてあたらしい美学を構築するとともに、美学の役割が科学技術者自身によって担われる可能性についても論じている。科学技術がどのようなものであるか（機械論）、そして、それが何のために存在し、それとどのように生きるべきか（目的論）、この双方への問いを研究者自身が示すのである。これは、バーチャルリアリティ分野（VR）の研究者にとっても、新しい研究者像を示唆するものであるように思う。近年VRでは、その科学技術をメディア芸術（*）と呼ばれる分野で使用する試みが盛んに行われている。しかし、それにあたり、美という視点はどれほど意識されているであろうか。何らかの客観的目的の下で生み出された科学技術において、それが何かという機械論的問いは自明である。しかし、それが何のために存在し、私たちの生にどんな意味をもたらすのか、目的論的問いは自明ではないし、科学技術の研究者がそれを問われることは殆どない。しかし、もし、研究者自らがそのような目的論的問いを自身に再度問い直し、示すことができれば、装飾や表現を超えた科学技術そのものの美（**）を見出すことができようになるのではないだろうか。

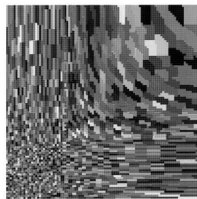
*：文化芸術振興基本法第9条(2001)では「映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術」と定義される。

**：吉岡洋 “VRの美学は可能か？”，日本バーチャルリアリティ学会誌 Vol. 15, No. 3, pp. 30-33 (2010)。



秋庭史典

あたらしい美学をつくる



みすず書房